

ネカフェ

で会った

長身イケメンお兄さんに

誰が来るか分からない状況で

乳首とおまんこ

をいじめられて声を潜めて

絶頂♡
する話



「うそっ!? もう終電無い!？」

スマホで電車の時刻表を調べつつ落胆する。今日は学生時代からの友人、鈴ちゃんと夜ご飯を食べに来ていた。仕事の愚痴や最近ハマっているものなど他愛もない話だったけど、思っていた以上に盛り上がってしまい、解散する頃にはとくに時計の針はてっぺんを超えていた。

鈴ちゃんは彼氏の家がここから近いのでそのまま泊まっていくらしい。今から向かう旨を彼氏に連絡している友人の顔はどことなく嬉しそうに見える。その様子に微笑ましさを感じると同時に、もう久しく彼氏がいらない私から少し羨ましい。

「私も出会いが欲しいなあ。今の職場も男の人ほとんど居ないし……アプリとかやってみようかな」

会計を済ませてお店を出る。ぼんやり思ったことをこぼすと、それを聞いた鈴ちゃん少し顔をしかめて、ピシヤリと言った。

「いや、結月押しに弱いし……ナンパとか告白された時とか強く断れないじゃん。前回の彼氏だって、あつちからガンガン押されて付き合ったようなもんだっし。よくぼんやりして隙だらけなんだから、変な男に捕まらないように気をつけなよ」

「っうう……」

思いもよらず飛んできた鋭い言葉に返答できなくなる。確かにグイグイ来る男の人の告白や誘いを断ることが苦手だ。ただでさえ私は背が低いので、男の人が目の前にいるとそれだけで圧を感じて萎縮して上手く話せなくなってしまう。（ちなみに前回の彼氏は、早々に浮気をされて別れた）

正直鈴ちゃんの言葉には心当たりしかない。どう返答したものか、もだもだしている私を尻目に「まあ、頑張つて！ 帰り道気をつけな」と言い残して鈴ちゃんは颯爽と人混みに紛れてしまった。

そして冒頭に至る。

「まだギリギリ電車あると思ったのに……仕方ない。明日休みだし……始発までどこかで時間潰そうかな」

しょんぼりしながらスマホで地図アプリを起動し、現在地から周辺のお店を探してみる。時間も時間なので、あまり一人でうろうろするのは心細いなあなんて思いつつマップを見てみると、ちょうどここから歩いてすぐの場所にネットカフェがあるらしい。

「あつ……！　ネカフェ近くにある！　よかったあ……久しぶりにゆっくり漫画でも読んでよ
うかな」

休めそうな場所を見つけ安堵する。読みたかったシリーズの続きあるかなあ。なんて少しわくわくしつつ、マップを頼りに目的地に向かって歩き始めた。

「では一四番のブースになります。ごゆっくりお楽しみください」

無事に到着し、受付を済ませる。ブースはちょこちよこ空きがあつて週末だけど意外とお客さんはまばらみたいだ。ネットカフェ特有の静けさと薄暗さの中、まずは自分のブースに行く前に漫画をとっていこうと本棚があるエリアに行ってみる。

（そういえば、一人でネカフェ来るのはじめてだなあ。当たり前だけどすごい本の数だよね……本棚がけっこう入り組んで、目当ての本探すの大変かも。えーっと、読みたかったやつは……………）

「届くかな……………」

読みたかった本は人気作だからだろう、比較的分かりやすい棚に並べてあった。が、置いてある位置が本棚の最上段だ。私の身長で届くか微妙な高さで周囲をざっと見渡してみる限り足場などは近くなさそうだった。正直こういうシチュエーションに遭遇することは悲しいことに珍しくは無い。仕方ない……と息をつき、背伸びをして腕をめいっぱい伸ばしてみる。渾身

の力を込めてみると、指先が背表紙にぎりぎり届くか届かないかの距離になった。

「っ~~~~！ あと……少し……」

ぎりぎりの距離がもどかしい。うぐぐぐと唸りなが、更に腕に力を込めたその時。

「これ？」

「っ!? ひゃあっ」

後ろから声がしたと同時に、私が取ろうとしていた本に大きな男の人の手が添えられる。突然の人の気配に小さく悲鳴をあげながら反射的に後ろを振り向くと、視界いっぱいスーツのジャケットが見えた。

「ああ、驚かせてごめん。さっきからずっと困ってそうだったから……大丈夫？」

「っ……あ、ごめんなさい……大丈夫で……っ」

不意打ちの声掛けによる心臓の動悸を抑えつつ、頭上から掛けられた声に返答しようと視線

を上にあげて……固まってしまった。

スつと通った鼻筋に薄い唇。長めの前髪から覗く切れ長で涼しげな印象を与える瞳。サラサラの黒髪がきめ細かい白い肌をより際立たせて……まるで芸能人のような風貌の男の人が、私を見下ろすように立っていた。

「この本？」

「……っあ、そうです！　ありがとうございます……っ」

突然目の前に現れた美形に思考停止していると、取りたかった本を目の前に差し出してくれた。私より年は上だろうか。ピシッとしたネイビーのスーツがお兄さんの落ち着いた雰囲気とスラッと長い手足によく似合っている。さっきの奮闘を見られていたことに恥ずかしさが込み上げつつも、ぺこぺこしながらお礼を言い本を受け取ると。

「……？　あ、あの……？」

そのまま立ち去るのかと思いきや、なぜかお兄さんは更に顔をぐつと近づけて、私の事を凝視してきた。身長は一八〇cmを超えているであろう、男の人と本棚に挟まれて身動きができ

ず、ただただ呆然と見上げることしかできない。

（な、なななに？　ち、ちか、近すぎる……っ！　身動き取れない……え、私の顔、なんか
ついてる……!？）

こんなに近いと私の顔が真っ赤になっているのも、心臓の鼓動がバクバクとしていることも
全て伝わってしまいそうで背中に冷や汗がじわりと滲む。

「君、一人で来てるの？　それとも彼氏と一緒に？」

「……っえ、……いや、その、彼氏なんて……一人で来てて」

「ああ、そうなんだ。いや、こんな時間に女の子一人珍しいから、気になって。終電逃しちゃっ
たの？」

「あ、えと、そうなんです。友達と会ってたらこんな時間になっちゃって……朝まで時間潰そ
うかかって……」

お兄さんの突然の挙動に軽くパニックになっていると、唐突に質問をされた。戸惑いつつも
混乱した頭で素直に答える。

（鈴ちゃんがここにいたら、「初対面の人に、そんな正直に答えちゃダメでしょ！」と怒られると思う）

そんな私の様子にふっと笑いながら、そっか。と言ってお兄さんは体を離してくれた。

「俺も今日接待だったんだけど長引いちやって。ホテル取るにも微妙な時間だったし……始発まで仮眠しようかと」

「……？　そう、だったんですね。それは……お疲れ様です……？」

「そしたら君が本棚の前で一生懸命背伸びしてるのが見えてさ。夜も遅いし、君みたいな可愛い女の子が一人なら、尚更気をつけてね」

「っ!?　いや、そんな、あ、あの……っ」

こんな美形なお兄さんにお世辞でも可愛いと言われて、思いつきり動揺してしまう。謙遜の言葉が上手く出てこなくてあたふたしていると、「それじゃ」とお兄さんは身を翻してその場を去ってしまった。

「何が起きたんだろ……」

突然の出来事に上手く処理ができない。まだ顔の熱が引いていかず、お兄さんの背中を見送りながら暫くその場に立ち尽くしてしまった。

「ふゝ、面白かった……」

自分のブースに持ち帰ってきた漫画を全て読み終えてしまった。ずっと集中して読んでいたけど、スマホで時間を確認するとまだ始発までは数時間ある。また別の漫画でも取ってこようと靴を履いて、漫画コーナーへ向かう。

（気になってたやつは一通り読めたしなあ……何か面白そうなのないかな……？）

なかなかピンとくるものがなく、本棚を眺めながら奥へ進んでいく。コーナーの隅の方まできた時に、ふと目に入った漫画の前で足が止まった。

「あ……さっきのお兄さんに似てる……」

表紙には目にかかるくらい黒髪、切れ長の瞳、スリッ姿の男の人が、女の人を後ろから抱きしめるように描かれていた。絵の雰囲気的に恋愛ものだろうか。先程会ったお兄さんを思い出してしまい、何となく手に取って中身をパラパラとめくってみる。

(……………ん？ ……あつ！ これ……TL系の漫画だ)

少し読み進めていくと、表紙の男女の濃厚なセックスシーンが描かれてて、ドキッとした。この手の漫画を読むのは初めてではないけど、キャラクターの男の人が先程会ったお兄さんと重なってしまう。

(……………って、いやいや！ ……いくら似てたとしても、そんな風に重ねちゃダメでしょ…………)

ただ親切にしてくれただけのお兄さんでそんな想像はしてはいけないと思うのに、意識すればするほど、絡み合う二人の描写から目を離すことができない。

二人は短いキスから徐々に舌を艶めかしく絡めあわせ、男の人が主人公の女の人を首筋から足の先まで唇で愛撫していく。乳首を指で弄られながら、激しく奥を突かれあられない嬌声をあげている主人公を見て、……………ついお兄さんに自分が同じように弄ばれてる妄想をしてしまう。こんな風に、自分の体をめちやくちやにされたら……………なんて考え、じわじわ湧き上がる下腹部の熱を誤魔化すように、太ももを擦り合わせる。

(……っとうしよう、変な気持ちになってきちゃった)

前の彼氏とは別れてから随分経つ。もちろんセックスだって暫くしていない。こんなところであっちな気持ちになってしまった自分に恥ずかしさを感じながら、募る体の熱に足をもじもじさせてると。

「ねえーお姉さん、ひとり？」

「ひゃっ……!？」

横から急に声を掛けられ、またもや悲鳴を上げてしまう。時間も時間なので、漫画コーナーに人気はなく、傍に人がいることに完全に気が付かなかった。慌てて視線を本から離すと、私の父親世代くらいのおじさんがにやにや笑いながら私の顔を覗き込むようにして立っている。

「あ、あの」

「小さくて可愛いなあと思ってさあ。こんな遅くに女の子一人じゃ危ないよ？」

「いや、そんな……」

「おじさんも一人で来てて寂しいから、ブース遊びに来ない？ 二人の方が楽しいでしょ」

お酒が入っているのだろうか。全身から漂ってくるアルコール臭に、つい顔を顰めてしまう。そんなこちらの様子も気にもとめずに、おじさんは話を続け、じりじり距離を詰めてきた。

「い、いえ、困ります。結構ですので……」

「そんなこと言わないで！ なんにもしないからさあ」

勇気をだして自分なりにきっぱり断ったつもりなのに、おじさんは全然引いてくれない。それどころか「ね！ 行こうよ。変なことはしないからさあ」と私に向かって手を伸ばしてきた。「どうしよう……っ」と嫌悪感で思わず目をつぶったその時。

「すみません、俺のツレなんですけど」

背後から声がしたと同時に、グイッと抱き寄せられる感覚。驚いて顔をあげると先程のお兄さんが、私を守るように後ろから抱きしめてくれていた。

「っえ、お、おにいさ？」

「嫌がつてるの分かんないですか？ 店員呼びますけど」

お兄さんは低い口調で牽制するように、冷やかかな目線をむける。自分より幾分も上背がある、突然現れた男の圧力にさっきまでニヤついていたお兄さんの表情は青ざめていき「あ、あゝ……、彼氏と来てたんだねえ。ごめん、ごめん」とこぼすと、そそくさと足早にその場を去っていった。

「…………大丈夫？ だから気をつけてねって言ったのに」

「はい…………すみません…………」

お兄さんが完全に立ち去ったのを確認してから、背後からお兄さんは窘めるように囁いた。お兄さんに言われた通り、周りをよく見てなかった自分にしゅんと反省をしながら素直に謝る。一度ならず二度までも助けてもらい、申し訳なさど不甲斐なさで胸がいっぱいになった。

「二回も助けてもらって、すみません、上手く断れなくて、困ってたので…………助かりました。

…………本当にありがとうございます」

「別に気にしないで。俺が勝手に割って入っただけだから」

気がついたら、先程の冷たい表情とはうって変わって、優しいお兄さんに戻っている。こちらを覗き込むように微笑むお兄さんに小さくドキドキしてしまう。前髪の間から覗く綺麗な瞳に見とれていると、ふと、お兄さんの腕が自分に回されたままだということを思い出して、慌てて身動きをする。

「あ、あの……っ！ ごめんなさい。本当にありがとうございました……！ もうさっきの人も居なくなっただけ……その、手離して頂いて大丈夫です」

「……」

「……？ え、えと……」

「ねえ、それ読んだの？」

「!!」

離れようにも、変わらずがっしりホールドされて動くことができない。困惑しているとお兄さんの目線がずっと持ったままだった漫画のページに注がれていることに気が付き、慌てて本を閉じる。

（うそ……っ、よりにもよってえっちなシーン見てたのバレた……）

「こ、これはその……」

完全に中身を見られ、恥ずかしさで顔が一気に熱を帯びていく。素早く本を棚に戻し、なにが言い訳をしようにも、どうしたって弁明の言葉は出てこないし、羞恥でお兄さんの顔を見ることができない。「絶対に引かれた……」と絶望していると、なぜかお兄さんの腕の力が強くなり更にお互いの体がピタリと密着する。

「……っえ、あ、あの、お兄さ」

「ははっ顔真っ赤にして可愛い。ごめん、つい意地悪しちゃった」

「……え？」

「実はさ、さっきのおじさんに絡まれる前から、君のこと見てた。その本読んで……一人でむらむらして、えろい事考えてたでしょ」

一瞬言葉の意味が分からなくて固まる。お兄さんがそんな事を言ったのが信じられず、反射的に見上げると、変わらず優しい表情をしているのに……なぜだろう。目の奥にどろりとした

欲が見えて、背筋がぞくりとする。

「ついえ、そ、そんなことっ……………あ、ひゃっ」

「えろいシーン読んで発情しちゃった？　こんなにちっちゃくて可愛い女の子が、顔真っ赤にして、足もじもじ擦り合わせて……」

「は、っあ、あの、手……」

「ふ、ちょっと体でただけなのに、そんなにびくびく反応しちゃうんだ。敏感すぎでしょ」

お兄さんの手が肩からゆっくり体のラインをなぞるように降りていく。服の上からお腹より下、子宮の上を円を描くようにじつとりと撫でられ、熱い掌の感触に小さく声が漏れてしまう。さっきの出来事で収まった熱が簡単にぶり返してくる。

「っふ……………♡お、おにいさ……」

「みなど」

「っ……………」

「俺の名前湊って言うんだ。君の名前は？」

「え、えと……………いや……………その……………」

「んー？ ……教えてくれないの？ 悲しいな」

「……っひゃ♡……あっ……え？ だめ、おっぱいさわっちゃ……」

「しー、大きい声出すと、人が来ちゃうよ？」

「っ、で、でも、そんな風に触られたら……」

「やわらか……触ると見た目以上に大きな……着痩せするタイプ？ 下着ちよっと下にズラすね」

「え、ちよっ……」

名前を聞かれ返答に迷っていると、お兄さんもといたさんに服の上からブラをずらされてしまった。薄手のニットのせいで、服越しでも乳首が半分勃起あがっていることが分かる。触って欲しいと主張しているみたいで、はしたなさに更に顔が真っ赤になる。

「お……乳首少し勃ってる。もしかして期待してる？ 服の上からでも、どこにあるか、はっきり分かる……やらしくて可愛い」

「……だ、だめ……っあ、ま、周り、指でクルクルしないでください……」

「だめなの？ でもほら、こうしてると……乳輪しか触ってないのに、君の乳首……ツンて勃起してきた」

「っふ……ん、……あ」

「指くるくるゝってしてるだけで……は、もうビンビンじゃん。触って触ってって一生懸命服の下から主張してる。……ねえ、どうして欲しい？」

「ゝゝゝっ、ふう……っ」

「……名前教えてくれたら触ってあげる。焦らされた勃起乳首、指でぎゅって摘んで……いっぱいすりすり擦り合わせてあげる。たくさん気持ちよくさせるから」

「だから君の名前、教えて？」と吐息混じりに耳元で囁かれ、それにすら焦らされた体が反応してしまう。こんな場所で、そんな事しちゃ駄目なのに……あの漫画みたいにお兄さんにされることを期待している自分がいる。優しく指の腹で乳輪をなぞられ、もどかしい刺激に初対面の人のなにとか、ここがどこかなんて考えは沸騰した頭から徐々に溶けだして、直接的な快感を与えてもらうことしか考えられない。

「ゆ、結月です。立花結月……っあ!? ひ、ひい♡あ~~~~~♡そ、そんな急に、ち、ちくびぎゅゝってつまれちゃ……っあ、んあっ♡き、きもちいっ♡だめ……っ♡」

「こーら。だから声抑えなきやダメだって……結月ちゃんっていうんだ。ちゃんと名前言えてえらいね。……教えてくれたお礼に焦らした乳首、思いつきぎゅゝゝってしてあげる。……」

指で摘まれて全身ビクビクさせて……可愛い」

「ん、ふづっ♡だ、だめ、声でちゃう……♡でちやいますっ……♡」

「だめ？ 本当にそう思ってる？ ……やめて欲しくないでしょ。もっと気持ちよくして欲しい顔してる……だから頑張っって声、我慢して」

自分の本心を見抜かれてどきりとする。言われた通り頑張っって声を抑えようと、口に手をあてていると、湊さんの長い指が勃起した先端を爪でカリ♡カリ♡と刺激してきた。敏感になっているそこが服と擦れて、快感に腰が抜けてしまいそうになる。

「っあ、くくく♡っん、ふーっ♡ふーっ♡そ、それ、よわい、先っばよわいっですう♡あっ、あっ♡爪でカリカリされるのきもちい……っんあっ♡は、指速いっ♡そんな速く動かされたら……っ♡♡」

「うん、こうやって服越しに勃起乳首弄られるの気持ちいいね。素直に言えて結月ちゃんはいえらい」

「っは、あ♡んっ、は、はいっ♡き、きもちい、ですっ♡敏感になった乳首、いっぱいカリカリされてっ……きもちっ♡……っあ、っはあ♡♡」

「くくっはあ、乳首だけで顔とろとろじゃん。こないっつ人が来るか分からないところで、そ

んなえっちな声出して……」

「だ、だって……お兄さんの、っあ、触り方が……ん♡っああ……♡」

「お兄さん、じゃなくて湊でいいよ。俺のせいじゃなくて結月ちゃんが快感に弱すぎるんでしょ……その証拠に……さっきから俺に腰ぐいぐい押し付けて揺らしてるくせに」

「……へ、そ、そんなこと……っ」

「無意識だったの？ ははっ、だとしたら余計興奮するな……こんなあどけなくて、えろいことに疎そうな可愛い子の中身が……こんなど淫乱なんて、ギャップありすぎでしょ」

そう言うとき湊さんの熱い手がニットの裾から侵入してきた。先程までの服越しではなく直に感じる体温に体が跳ねてしまう。

「ひゃ……っ♡ちよくせつ、おっぱい触られて……あっああ♡また乳首摘まれちゃ……あ♡」

「は、手に吸い付く……しっとり汗かいてて、体あつくなってるね……ほら、こうして、弄られてピンピンになってる乳首、親指と人差し指でシコシコしごいてあげる」

「え、くくっ♡はっ、あっああっ……♡あ、み、湊さんの指でしこしこされるの、きもちづ……♡お腹の底からっあ、びりびりするっ♡こ、腰動いちゃぐっ♡だめ、ぎゅくくっ♡って乳首つままないで……っ♡あ、はあああ……っ♡♡」

「あー……これ目の毒だな……初対面の男に乳首触られて、こんな乱れて……」

「だ、だって……私もこんなに乳首、あ、はぁ♡い、いつもは感じなっ……♡」

「なにそれ、素で言ってるなら可愛いすぎでしょ。……俺が指動かす度に、ねだるみたいに腰くねくねさせてる。……もしかして、他にどこか触って欲しいの？」

「♡っ♡……っぁ」

「ちゃんと教えて。結月ちゃんは勃起乳首しこられるだけじゃ足りない？　たくさんおっぱい触られて……子宮の奥キュンキュンしてるでしょ……今イきたくてイきたくて仕方ないんじゃない？」

「っは、あ……♡ふ、ふぅっ♡♡」

「オレはずうっとうしててもいいけど……ねえ、どうしてほしい？」

分かってはいるはずなのに、変わらず湊さんは私の乳首を虐めてくる。与えられる快感はどんどん蓄積され、逃げ場がなくお腹でぐるぐる渦巻いて辛い。あともう少しの刺激があればイケそうなのにつ！　頭の中がそれだけに支配され「はーっ♡はーっ♡」と荒い呼吸を漏らしながら、背後の湊さんを見上げる。

「お、お願いします……触って……」